

第9回世界水泳医学・バイオメカニクス学会への参加 (at Saint-Etienne, France)

菅野 篤子*・下山 好充**

Report on IXth World Symposium Biomechanics and Medicine in Swimming

SUGANO Atsuko*, SHIMOYAMA Yoshimitsu**

【緒言および目的】

2002年6月21日～23日にかけて、第8回世界水泳医学・バイオメカニクス学会 (IXth World Symposium Biomechanics and Medicine in Swimming: WSBMS) が、フランスのサンテ・ティエヌ (Saint-Etienne) で開催された (写真1)。この学会は、4年に1回行われ、水泳関係の学会の中でも最も大規模な国際学会で、世界中から水泳・水中運動関係の研究者が集まってくる。学会が包括する分野は大別すると科学分野と応用分野と二つから成り、水泳に関連する20近くものテーマが挙げられている。今回、本シンポジウムに参加する目的は3つあった。1つは国際学会での発表、2つ目は水泳や水中運動の研究に関する情報収集及び施設見学、そして3つ目は水泳・水中運動の海外

の研究者との情報交換および交流であった。

【学会内容およびその成果】

本シンポジウムが行われた Saint-Etienne は、リヨンから60 km 離れたところに位置し、人口20万人、フランス南東への出入り口となっている町である。本大会長は Dr. Jean-Claude Chatard が勤め、学会会場は、市内の conference center が用いられた。筑波大からは、野村武男教授を始めとし水泳研究室のメンバー11名の教官・準研究員および大学院生が参加した (写真2)。

学会初日 (6月21日) は、開会后、Dr. Pelayo (France) の『Biomechanical and pedagogical conceptions in swimming』について仏語での招待講演で封切られた。会場では同時翻訳イヤホンを利用すること

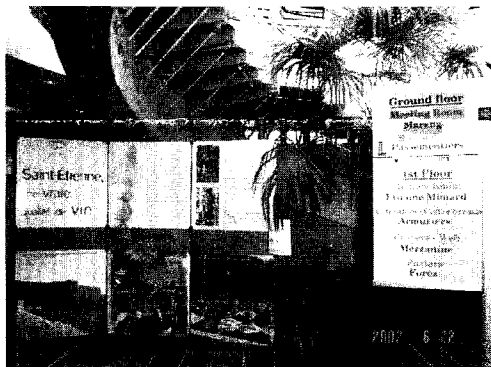


写真1. 学会会場 (Saint-Etienne)



写真2. 筑波大学水泳研究室メンバー

* 筑波大学体育科学系 Institute of Health and Sports Sciences, University of Tsukuba

** 筑波大学体育センター Sport and Physical Education Center, University of Tsukuba

ができ、仏語と英語の同時通訳付きではあったが(写真3)、国際学会にもかかわらず初っ端から仏語での発表ということに驚きを覚えた。内容は、水泳指導法の歴史についてで、1538年に初の水泳教本が出版されてから、軍隊の訓練の一貫として、競技としてどのように指導法が発展してきたのかなどを示した興味深い内容であった。続いては、『Active drag in swimming』(Dr. Wilson, New Zealand)の講演が行われた。その後、coffee breakを挟んで、高木講師の発表を始めとして口頭発表(Performance, Technology)が続いた。ランチは、水泳研究室のメンバーの他に学会会場で知り合いになったフィンランド人の女性で、一児の母ながらライフセービングの研究のためオーストラリアに留学を控えたPolineと一緒にいただいた。

午後一番の招待講演は、Dr. Guezennec (France)による『Hormones and fatigue in swimming』であった。ホルモンに関しては、我々も研究の指標として扱っており、氏の論文は何編か目を通していたので、その著者が目の前で講演していることに小さな感動と興奮を感じながら聴き入った。その後、口頭発表では、Physiologyの部で野村教授、Techniqueで院生の仙石氏の発表が続いた。間に挟まれたCoffee breakでは、ワインとメレンゲ(卵白を泡立てたお菓子)のカスタードソースかけ(Laiterie et Cotes du Forez)という伝統的なフランスのお菓子が提供された。なかなかの美味であった。

そして、Dr. Noakes (South Africa)の『What really cause fatigue during swimming? Going beyond』の招待講演後、再び、Physiology、Techniqueの口頭発表が行われ、ポスター発表が行われるころに

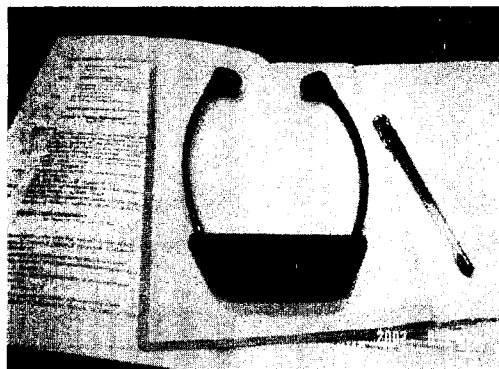


写真3. 仏・英語同時通訳用翻訳付

は、19時近くになっていた。ポスター発表では、院生の若林氏、富川氏が多国籍研究者達を相手に活発なディスカッションを行なった。

そして、ポスター発表が終わるか否かのうちに、バスで町のゴルフ場でのパーティに連れ出された。誰もゴルフをせずにゴルフ場を背後に仰ぎながら、立ち話でワインと冷菜をいただくというパーティであった。最初は恥ずかしさもあり日本人とばかり話をしていましたが、アルコールがまわってくると、仏学生と自己紹介したり仏文化について色々と教えてもらい楽しい時間を過ごすことができた。丁度、ワールドカップでフランスまさかの敗退という時期だったのでサッカーの話題は禁句だということだった。噂通りフランス人の学生の英語はどちらかというと流暢とはいえず親しみやすかった。そのため、かえって緊張せずにコミュニケーションをとることができた。

翌日2日目(6月22日)は、Dr. Persyn (Belgium)の動画を多彩に活用した『New hydrodynamic concepts in swimming』の招待講演から始まりHydrodynamic、Water-Poloの口頭発表、coffee breakを挟んで、『Asthma and swimming』(Dr. Vergnon, France)の講演、startとmedicineの部の口頭発表が行われた。その後、ランチをいただき、Weight training (Mr. Cometti, France)の講演が行われ、start/tern/forceの部、detection/ prediction/ psychologyの部の口頭発表、coffee break後、Dr. Mujika (Spain)のTaperについての招待講演が行われた。

夕方のポスター発表で、多くの人だかりのなか、下山、院生の市川氏が発表を行なった(写真4)。国際学会発表2回目でもあったことから緊張

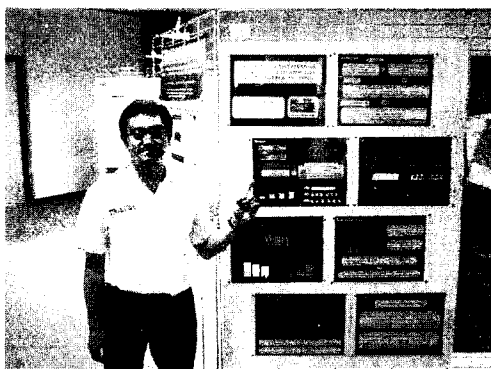


写真4. ポスター発表(下山)

せず、落ち着いて発表することができた。

この日の夜は学会のスポンサーのひとつであった圧力靴下メーカー Ganzoni 主催によるレセプションによってしめくられた。

最終日(6月23日)は、8時半からDr. Barthelemy (France) による『Relation between heart rate variability and training load』、続いて、Dr. Pyne (Australia) による『Immunity, illness and competition performance in elite swimmers』の招待講演が行われた。その後、Medicine, trainingの部の口頭発表が続いた。3日目は多くの学会参加者が観光に出かけたのか少し会場の人数が減っていた。菅野の発表は、正午のmedicineの部で行われた(写真5)。口頭発表ということでもかなり緊張はしたが、あっという間に時間は過ぎ、発表と質疑応答を無事に終えることができた。

正午過ぎに全ての発表が終了し、午後はプール内での機器展示および競技会が近くのプール施設で行われた。多くの水泳研究者が集まるこのシンポジウムのフィナーレは毎回、最終日に行われる全員参加の水泳レースで締めくくられる。今回の参加ルールは、4人1組で女性を1名メンバーとして迎えなければならず、菅野は大会会長 Dr. Chatard 率いる仏チームのメンバーの一員となった。筑波大水泳部の鯨肌水着を着て日本の宣伝をしつつ(チーム名はTeam Shark Skin) 見事第2位という好成績を収めることができた(写真6)。一方、下山はギリシャ人の元近代五種オリンピック選手Alex、日本のトライアスロン選手等と最強と思われるチームを組んだが、女性を1名参加させるというルールでエストニアの美女とメンバーチェンジとなりレース不参加に涙を吞んだ。

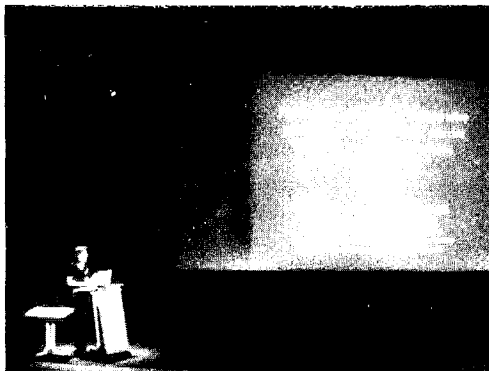


写真5. 口頭発表(菅野)

学会の閉会式や表彰式を兼ねた Farewell party は、お城(chateau)の中で催され(写真7)、ヨーロッパNo.2のソムリエによって選ばれたワインとフランス料理のディナーを楽しむというフランスならではの演出の中で行われた。同席したのは、日本からの水泳の研究者の他に、WSBMSの第1回目大会会長であったDr. Hollanderや、フランスのRennes2大学でフィンの研究をしている学生達であった。食事中は、フランス人が何故あまり積極的に英語を話さないのかという話題で盛り上がった。そもそも今回の学会は国際学会にも関わらず、講演やディスカッション中に仏語が頻繁に飛び交い、公用語は仏語のような状況で行われた。仏学生に言わせれば「Maybe, We think We are French! Why should we use English!?!」とのこと。オランダ出身のDr. Hollanderは、フランスはヨーロッパの中でも広い土地を持ち、大きく豊かな国のため英語を学ばなくても自給自足が可能だが、我々の国、オランダやポルトガルなど小国



写真6. Team Shark skin (Dr. Chatard, Dr. Mujika, 私, Dr. Pélayo)



写真7. Farewell partyが行われた古城

は英語を使わないと生き残っていけないのだと解説してくれた。ディナーが終わるころには0時を回っていたが依然、どこのテーブルもフランス産の美味しいワインを楽しみながら、国際色豊かな話題で盛り上がっていた。

以上、学会に参加した3日はあっという間に過



写真8. 次回学会開催国、ポルトガル出身の Susana と Carla と一緒に

ぎ、3つの目的もおおよそ達成することができた。4年後はポルトガルが次回の開催地となるとのこと、研究を発展させて是非また参加したいと思う（写真8）。

付記) この学会は、平成14年度筑波大学栗原基金からの助成を受け参加した。

【発表内容】

- ・ Sugano A, Wakabayashi H, Aoba T and Nomura T, Physical and psychological changes after participation of 8-week water exercise in chronic low back patients; 12-month follow-up. IXth World symposium Biomechanics and medicine in swimming, Saint-Etienne, France, 2002. 6.
- ・ Shimoyama Y, Tomikawa M, Nomura T. The effect of rest period on energy system contribution during interval swimming. IXth World symposium Biomechanics and medicine in swimming, Saint-Etienne, France, 2002. 6.